様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20710187
研究課題名（和文）
インドネシア華人の再移民と中国・香港・台湾―バンカ・ブリトゥン州を起点に―
研究課題名（英文）
Remigration of Chinese Indonesians and China, Hong Kong and Taiwan
研究代表者 北村　由美（Kitamura Yumi）
京都大学・東南アジア研究所・助教
研究者番号：70335214

研究成果の概要（和文）：
本研究では、1950 年代後半から 1960 年代にかけて、中国に（再）移民した後に文化大革命を経て香港に移動したバンカ・ビリトゥン州出身のインドネシア華人に焦点をあて、インドネシアと香港の双方で調査を行った。その結果、移動の主要な理由や、移動した当時の状況など移動に関する背景と事実や、現在のインドネシアとの関係、言語能力など様々なファクターが明らかになった。本研究を基盤として、今後は中国や台湾および東南アジアの他国をフィールドとする研究者を交え、共同研究としてより複合的かつ多層的に検討していきたい。

研究成果の概要（英文）：
This research project mainly focused on the Chinese Indonesians from Bangka Belitung province who migrated first to China from late 1950s to 1960s then to Hong Kong. By conducting the fieldworks in both Indonesia and Hong Kong in 1970s, various facts relating to the re-migration such as main cause of re-migration and condition of the migration were confirmed. In addition, their relationship with contemporary Indonesia, their ability of languages became clear. As a future research proposal, it is necessary to conduct co-research project with the specialists on mainland China, Taiwan, as well as other Southeast Asian countries, in order to obtain more holistic view on the re-migration of Chinese Indonesians.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,117,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,937,000

研究分野：地域研究
科研費の分科・細目：
キーワード：東南アジア・インドネシア・華僑・華人・移動・移民

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦後、すでに数世代以上に亘って定住していた東南アジアを離れた華人は少なくない。インドネシア華人の場合は、旧宗主国であるオランダや中国や台湾が主な目的地となった。華人の国際移動の要因は、国によって多少の差があるが、戦後の 80 年代までの東南アジアにおいては、①植民地時代から国民国家に移行する際の対華人政策の変更、②中華人民共和国の成立、そして③冷戦下における東南アジア各国の同化政策の強化の 3 点があげられる。中でもインドネシアからに移動した華人の人数は多い。1950 から 1965 年までの期間にインドネシアを離れた華人は 13 万人とされ、うち約 9.6 万人が中国へ、約 2000 人が台湾に移動したとされる。このような華人の（再）移民に関しては、中国に「帰国」後、文化大革命を経て香港に定住したパレンバン華人を対象とした Wang (2003) の研究や、広東省における「帰国華僑」向け華僑農場を調査した奈倉 (2007) などが挙げられる。これらの研究はインドネシア華人の移動の実態を、移動先において描き出すことに成功しているが、移動にいたるまでのインドネシアにおける状況の記述が薄く、また移動の動機も中国への親近感という心情面が強調される傾向が強い。インドネシア華人の再移動に関して、インドネシアと移動先双方における事実を包括的な研究はなされていない。

２．研究の目的

本研究は、1950 年代以降におけるインドネシア華人の再移民の実態を捉えることを目的としている。グローバル化が進み中国のプレゼンスが増す現代社会において、世界最多の華人人口を抱える東南アジアから中国への（再）移民は、中国から東南アジアへの新移民同様、中国と同地域の関係性を理解する上で重要なファクターである。本研究は、バンカ島を中心とするバンカ・ブリトゥン州出身者をはじめとするインドネシア華人が中国・香港・台湾へ（再）移民し、生活し、新たなネットワークを形成する過程の中を実証的に検証することで、インドネシアをはじめとする東南アジアにおける国家・制度・人の複雑な結びつきと中国の影響を歴史的に解明することを目的としている。

３．研究の方法

本研究期間中は、主にインドネシアと香港における文献調査と聞取り調査を行った。文献調査としては、インドネシアにおいては、華人系新聞 *Sin Po*（新報）など、当時の新聞を閲覧し、事実関係の確認を中心に行った。一方、香港では、バンカ・ビリトゥン州出身の華人らの団体による出版物の収集を行った。聞取り調査としては、双方における関係者の当時の状況と現在の交流状況を中心に情報収集を行った。

４．研究成果

① <u>移動のための主要な要因</u>

家族で移動した場合の主要な要因としては、スハルト政権成立以前の大統領令 1959 年第 10 号による都市部における商業への制限を挙げるインフォーマントが最も多かった。移動の手段としては、中国から 1959 年と 1960 年に派遣されたこれらの「帰国」希望者を迎えるための船に乗った人が多く、現地の中華総会や華文学校経由で情報が広まった。一方個人の場合は、進学が理由となっている場合が多かった。

② <u>アイデンティティの問題と移動先</u>

本研究では、帰属意識や教育背景が移動先の選択にいかに影響をおよぼしたかに注目した。その結果、アイデンティティと結びつけて語られる教育や中国との関係性よりも、各家庭の経済状況とタイミ

ングが重要であることが分かった。それに関しては、オランダへの移動を選んだ華人と平行して検討することでより明確になった。学校教育との関係性を例にあげると、必ずしも華文学校の卒業生やその家族など心情的により中国や台湾に近いとされる人々がそれらの国々を、なんらかの形でオランダ語教育を受けた人がオランダを移動先として選択した訳ではなかった。また、同一家族の中でも経済状況とタイミングによって移動先が同一でないことが多かった。

③ 現在のインドネシアとの繋がり
1998年にインドネシアでスハルト政権が崩壊し、インドネシアとの行き来がより自由になったことや現役を引退する年齢にさしかかったこともあり、インドネシア在住の旧知の知人を経由してビジネスを行う機会や、相互に往来する機会が増加している。その1つの窓口が、インドネシアにおける華文学校の校友会で、バンカ出身者の場合 2006 年に結成された邦加華文学校校友会がある。この校友会は、香港在住のメンバーが中心だが、中国やマレーシア在住のメンバーも参加している。また、同校友会メンバーの多くは、香港廣西印尼帰国華僑連誼総会にも所属している。

④ 言語の問題
現在香港に居住するバンカ出身の華人の場合、幼少期に話していた客家語、インドネシア語と華文学校および中国本土で学習した北京語と、香港に移動してからの生活において習得した広東語が入り交じって使用されていた。それぞれの言語のレベルは、個々人の経歴や配偶者の出身地にもよるが、同じバンカ出身の華人同士の会話においては、それらすべての言語が使用されていた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 北村由美. 2009.「交渉成功 ―インドネシアにおける儒教の再公認化と華人－」『華僑華人研究』6: 20-39.

② Yumi Kitamura. 2009. The Question of Identity and Religion in Post-Suharto Era:Successful Negotiations Over the Re-recognition of Confucianism as a "Religion," in *Proceedings of the CSEAS-Netherlands Institute for War Documentation Joint International Workshop on "Chinese Identities and Inter-Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia,* edited by Caroline Hau, pp.227-242, Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

〔学会発表〕（計２件）

① 北村由美.「ポスト・スハルト期インドネシアにおける華人の動向から」『国民であること・華人であること－20 世紀東南アジアにおける秩序構築とプラナカン性』パネル, 東南アジア学会, 於愛知大学豊橋校舎. 2010 年 6 月 6 日.

② 北村由美. 「ジャカルタの「言語景観」にみられる中国語使用と華人」, 日本インドネシア学会, 於京都外国語専門学校. 2009 年 11 月 28 日.

〔図書〕（計２件）

① Yumi Kitamura. 2010. Pemakaian dan Perubahan Bahasa Cina dalam Linguistic Landscape di Jakarta, in *Geliat Bahasa Selaras Zaman,* edited by Mikihiro Moriyama and Manneke Budiman, pp.372-404, Jakarta: Gramedia.

② 北村由美. 2009. 「ジャカルタ言語景観における中国語使用と変化のきざし」『多言語社会インドネシア』森山幹弘、塩原朝子（編著）, 259-282 ページ所収. 東京：めこん.

６．研究組織

(1)研究代表者

北村　由美（Kitamura Yumi）

京都大学・東南アジア研究所・助教

研究者番号：70335214

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし